

地方中心都市におけるスポーツツーリズムの取り組みの検討

北濱 幹士 *

(受付 2015 年 9 月 30 日)

(受理 2015 年 12 月 16 日)

Consideration of Efforts toward Developing Sport Tourism in Regional Cities

by
Kanji KITAHAMA *

Abstract

The Japanese government has announced a national policy of “increasing of the number of foreign tourists visiting Japan annually to 20 million people by 2020.” Foreign tourists have multiple reasons for visiting Japan. Therefore, this study focuses on “Sport-related Tourism,” and especially investigated sport tourism in important regional cities.

Several larger cities have already established associations to promote sport-related tourism, and have started advertising or holding world-class tournaments. Examples include the 2019 Rugby World Cup, and 2020 Tokyo Olympics and Paralympics. However, other regional cities have not yet started their foreign tourist promotions. The main finding of this study indicates that the most importance thing is to establish a sport commission which will encourage and support tourists who are also interested in sport, to cooperate with neighboring communities, and to position several larger cities as a hub for “Sport-related Tourism” as soon as possible.

Keywords : Sport-tourism, Regional city, Sport commission

1. 諸言

観光立国への行動計画として、「2020 年までに訪日外国人旅行者数を 2000 万人」の目標値数が発表された。年間 1000 万人の訪日外国人旅行者数越えが達成されたのが 2013 年、今後約 5 年で倍の 2000 万人といった数値が国家成長戦略における 1 つの指標とされている^(注*)。

この目標値達成の為に、観光に関する各方面からのマーケティングや旅行者獲得の為に広報等は勿論の事、一国・地域集中からの訪日では無く、世界中から幅広く観光客を誘致して行く必要がある。また、「観光(ツーリズム)」を幅広く捉え、観光の持つ可能性・将来性も含めて考えていくべきである。つまり、目標値達成だけでなく、これを機会に日本の観光産業の幅を広げて行く事が重要である。都市・都市圏から地方中心・中小都市に至るまで様々な「観光(業)」の裾野を広げる事によって、国家の経済成長の為だけではなく地域の文化資産発掘・再考等による地域活性化(経済活性化)にまで至る持続可能で包括的な成長を確保できるのではないだろうか。

近年、東京への一極集中の見直しが始まり、「地域活性」或いは「地域創生」が推奨され、各自治体ではコミュニティの強化、農業・林業・漁業・鉱業や製造業などを含

む地域産業の発展・振興、商店街の活性化、地域通貨・地域振興券など様々な取り組みがされてきた経緯がある。しかし、各自治体・個別業種での取り組みには限界があり、上記した具体的な取り組みを継続している所は多く無い。そこで、新たな地域活性化の方策として、様々な業種を包括的に扱う事が可能な「観光」が着目された。各自治体が観光に纏わる様々な取り組みを始め、スポーツもその取り組みの一翼を担っているのが現在の状況である。

今後、多くの訪日外国人を呼び込める可能性を持つメガ・スポーツイベントが、ラグビーワールドカップ 2019、そして 2020 年東京オリンピック・パラリンピックである。この 2 つのメガ・スポーツイベントを目当てに訪日する外国人をどれ程までに「日本最良(好き)」にさせて、再訪へと繋ぐ事ができるかが非常に重要な課題である。つまり、この 2 つのイベントの成功こそが、日本の観光政策における生命線とも言えるだろう。この 2 つのメガ・スポーツイベントは、継続的に日本で開催されるのではなく、一時的なものである。また、開催予定地の多くは、三大都市(圏)及び地方中核・中枢都市(圏)であり、国民の生活圏の中心でもある地方中心都市は含まれていない(釜石市等の例外あり)。日本の観光立国化に

は、日本列島を中心に南北、そして南西に広がる多くの島々、或いは南北で大きく異なる気候と気温など、日本独特の環境を十二分にPRしていくべきである。更には、四季折々が感じられ、国民の生活に密接した地域環境を有する地方中心都市（圏）からの取り組みこそが、今後の観光を支える大きな柱になるのではないだろうか。

大都市同様、スポーツや観光による地域の活性化に大きな期待を抱いている地方中心都市は多い。従って、地方中心都市におけるスポーツツーリズムの現状を明確化しておくことが必要である。そこで本稿では、今後の地方中心都市におけるスポーツツーリズムに主眼を置き、地方中心都市のスポーツツーリズムの取り組み及びその更なる可能性を明らかにすることを目的とする。（なお、文中において「スポーツ観光」、「スポーツツーリズム」、「スポーツ・ツーリズム」を併用して使用している。これらは、各省庁や参考文献・資料における使用方法に基づいて表記する。）

2. スポーツツーリズム

かつての日本では、スポーツは身体活動である事が重要視され、スポーツイベントやスポーツ施設等が観光資源として捉えられる事は少なかった。例えば、登山、海水浴、スキーなど宿泊を伴うスポーツ種目も人気を集めていたものの、「スポーツツーリズム」は観光業における1つのコンセプトとして扱われる事がなかったのである。長年「スポーツ」と「ツーリズム」は、別々に取り扱われてきたが、国家成長戦略の政策として観光庁が設置されると共に「スポーツツーリズム」と言った新しいポジションを形成するまでに至った。しかしながら、新しい概念であるからこそ「スポーツツーリズム」として扱う範囲が各省庁・自治体・企業によって曖昧である（概念・範囲に関しては後述する）。また、その名称においても、スポーツ観光、スポーツツーリズム、スポーツ・ツーリズムと様々である。

スポーツ・ツーリズムにおける研究枠組みに関する研究を行っている工藤らは¹⁾、2002年現在においてツーリズムの観点からスポーツ活動を捉えた先行研究はあまり蓄積されていないことを報告している。同じく、秋吉らは²⁾、スポーツツーリズムに関する調査や研究は、スポーツツーリストに焦点が当てられる事が多いと報告している。

〈2.1〉 スポーツツーリズム

我が国のツーリズムを管轄する観光庁は、2008年10月に国土交通省の外局として設置された。2011年6月14日に「スポーツツーリズム推進基本方針 ～スポーツで旅を楽しむ国・ニッポン～」が取りまとめられ³⁾、日本におけるスポーツツーリズムの方向性が示されることになった。スポーツツーリズム推進連絡会議では、総合的なスポーツ観光を推進する事により、インバウンド拡大及

び国内観光振興を図る事を目指している。その中心となるのが、個人が行う各種スポーツを『する』活動に対して、更なるコンテンツを開発し、旅行行動を喚起する「するスポーツ」、プロスポーツを含む各種様々な大会・イベントを『みる』行動に対して、新たな観光の魅力を加える「みるスポーツ」が挙げられる⁴⁾。また、スポーツ大会・イベントの誘致・開催、それらを『支える』ボランティアスタッフによる交流等を創出する「支えるスポーツ」の役割も重要視されている。

観光庁が設置された事により、民間レベルでのスポーツツーリズムの活動も活性化を始めた。2012年4月に一般社団法人スポーツツーリズム推進機構が立ち上がり、スポーツツーリズム・カンファレンス、スポーツツーリズム・コンベンションなどの事業が開催されている⁵⁾。また、独立行政法人国際観光振興機構（日本政府観光局）が訪日プロモーション事業の実施主体と位置付けられ、観光立国実現に向けての整備がされた⁶⁾。

スポーツツーリズムの概念として、いよぎん地域経済研究センターが紹介している「スポーツツーリズムの概念図⁷⁾」を引用して紹介する（図1参照）。スポーツに纏わる「観る・する・支える」に既存の観光要素である「自然環境、歴史・文化、施設・インフラ」が交じりあうのがスポーツツーリズムである。つまり、どちらかだけでは無く、相互の良好な関係がスポーツツーリズムといった相乗効果を生み出し、インバウンド拡大及び国内の観光を成長させるのである。

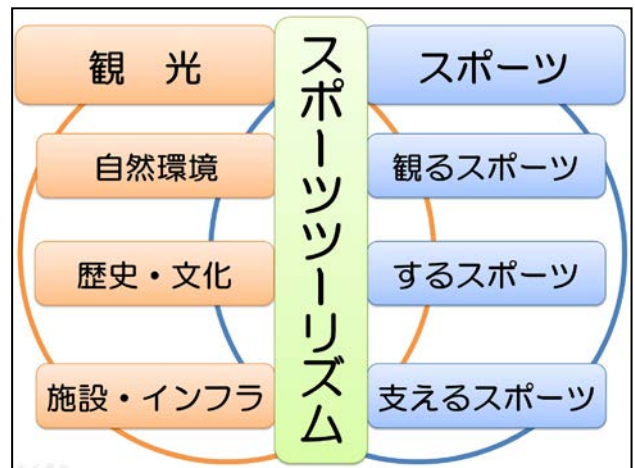


図1 スポーツツーリズムの概念図

（出典）株式会社いよぎん地域経済研究センター：
インバウンドの視点から見た、スポーツツーリズムの可能性

〈2.2〉 スポーツツーリズムの範囲

スポーツツーリズムの範囲は非常に幅広く多岐に渡る為、スポーツツーリズム全てを扱うのではなく、地域性などを活かして戦略的に対応する必要がある。その一例として、日本政策投資銀行が検討している「スポーツツ

ーリズムの範囲⁸⁾」を下記に引用する（図2参照）。

日本政策投資銀行が一例として挙げているスポーツツーリズムの対象は、屋外から屋内競技に至る全てのスポーツ種目である。誘客の手段としては、キャンプ・合宿の誘致、スポーツを楽しむ事を主目的とする個人・団体客の誘致、そしてスポーツ大会・イベントの開催と分かれる。尚、本報告書におけるスポーツツーリズムは、地域資源を活用した観光であり、プロスポーツのホームタウンとしての地の利を活かして観戦客を呼び込むものは対象外とされている。

勿論、プロスポーツのホームタウン制度を活用し、観戦客を呼び込む考え方もある。多くのプロスポーツでは、ホーム&アウェー形式で試合が開催されている。選手のみならずファンも含めると数百人～数万人が、試合観戦の為に町から町へと移動している。人が動けば交通機関・宿泊施設・飲食関連と様々な異業種において経済効果が生まれる。スポーツが生み出す幅広い産業効果である。また、アメリカのプロスポーツの全チームが市内中心部にスタジアムを保持している。スタジアムが中心市街地にある事で、試合前後のアウェーの訪問客を観光客として取り込む事ができている⁹⁾。また、チームがホームタウンに存在している事は町のステイタスにもなり、地域活性化を担っているとも言える。

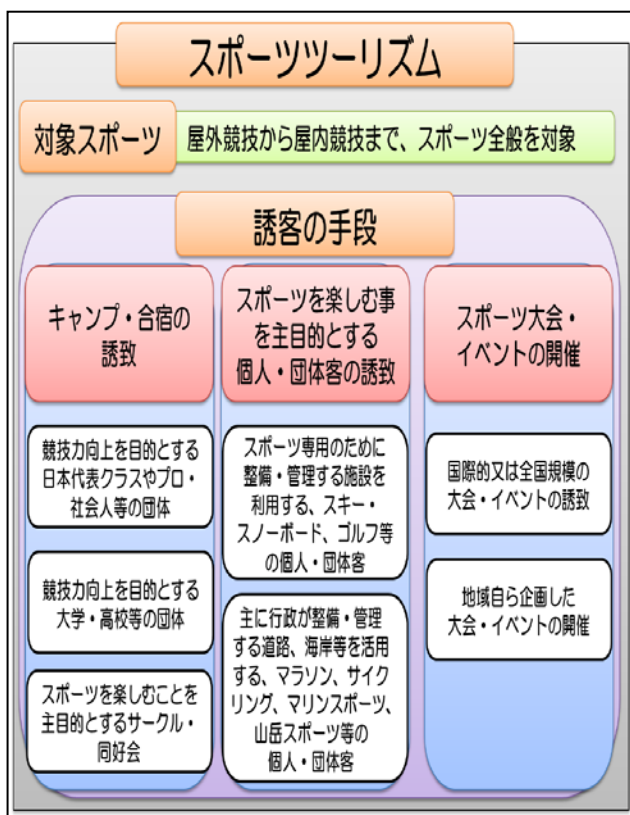


図2 スポーツツーリズムの範囲

(出典) スポーツツーリズムの展開
～地域資源を活用した観光地域づくりの一例～：日本政策投資銀行

3. 地方中心都市におけるスポーツツーリズムの現状

地方中枢・中核都市・都市圏（県庁所在地および人口が30万人以上）と連携を図りつつ、地域の特性に応じた育成を図っているのが地方中心都市（人口10万人程度）である。また、地方中心都市は、周辺農村漁村を含めた地方圏において、生活活動の中心としての役割を担っている¹⁰⁾。この生活基盤の拠点である、地方中心都市におけるスポーツツーリズムの現状を探る。全ての地方中心都市が外国人訪問客を熱望しているとは限らないが、日本人のスポーツツーリストでさえ集まらない場所に外国人が訪れる事は考え難いであろう。

日本全国の地方中心都市より、東北地方の岩手県花巻市、そして九州地方の福岡県宗像市を事例として取り上げてみた。両市は平成の大合併により人口・面積が増大し、現在は共に約10万人規模の人口を擁している市である。また、両市はそれぞれの県内において、地方中心都市の位置付けでもある（花巻市：北上・花巻都市圏、宗像市：宗像・糟屋北部圏）。両市の概要比較は表2を参照して頂きたい。

表2 花巻市と宗像市概要

	花巻市	宗像市
地方（県）	東北地方（岩手県）	九州地方（福岡県）
総人口	97,717人	96,526人
面積	908.39km ²	119.91km ²
人口密度	108人/km ²	805人/km ²
隣接自治体	盛岡市、北上市、遠野市、奥州市、宮古市、和賀郡西和賀町、岩手郡雫石町、紫波郡紫波町	福津市、宮若市、鞍手郡鞍手町、遠賀郡岡垣町、遠賀町

〈3・1〉 花巻市の取り組み及びその課題

花巻市は岩手県のほぼ中央に位置し、人口は97,717人と県内では4番目である（2015年度現在）^{*2)}。岩手県内の市町村の多くは、5万人以下の地方中小都市であり、人口1万人に満たない町村は8つある。従って、北上・花巻都市圏における地方中心都市である花巻市の存在は非常に大きい。

市内には県内唯一の空港である、いわて花巻空港を始め、新花巻駅（東北新幹線）、4つのインターチェンジ（東北自動車道、東北横断自動車道）があり、高速交通網が完備されている。市内西部には、13の温泉と7,000人を収容可能な30軒を超える温泉宿泊施設があり（花巻温泉郷）、その周辺は県立自然公園に指定されている。

2011年2月策定の「スポーツでまちづくり構想」により、スポーツ施設の整備とその活用の方針が示され、市

の施策として大規模スポーツ大会・イベント、スポーツ合宿の誘致に取り組んでいる。また、これらの誘致拡大を目的としてスポーツコンベンションビューローが設立されている¹¹⁾。

はなまきスポーツコンベンションビューローが置かれている花巻市総合体育館は^{*3)}、1997年に竣工され、その後、2011年には第3アリーナとしてとして花巻市総合体育館アネックスが完成した^{*4)}。この総合体育館界限には、花巻球場^{*5)}、日居城野陸上競技場^{*6)}、日居城野テニスコート(人工芝・クレー)、日居城野多目的広場などのスポーツ施設が集約されている。この他、花巻市が他町村合併した事もあり、市内各地区に野球場、体育館が備わっている。他にも、クレー射撃場、スポーツキャンプ村(天然芝グラウンド)、鉛温泉スキー場などが点在している。

はなまきコンベンションビューローによると、2013年度に開催された大会・イベントは合計76回を数え、約18万人が関わり、2万人以上が宿泊を伴い、その経済波及効果は約13億4000万円としている。なお、2016年には、希望郷いわて国体(第71回国民体育大会、第16回全国障害者スポーツ大会)が行われ、花巻市では冬季大会を含む11競技が開催される予定である。これにより今後一層の経済波及効果が期待されている。

花巻市の課題は、利用客の誘致(地理的・金銭的・日程的)である。地理的要因としては、多くの利用客が見込める関東圏からの客は、福島(仙台)までが多く、岩手県は関東から遠いといったイメージが強い(仙台～花巻は東北新幹線で約60分)。金銭的には、宿泊施設として位置付けられている温泉宿泊施設と高校・大学主体のスポーツ合宿とでは料金に乖離があり、互いに敬遠しがちである。日程的な課題としては、多くの大会を誘致する事により施設確保の日程が難しく(大会開催優先順位)、誰の為・何の為のスポーツ施設なのかが問われている。つまり、土・日曜日は様々な大会が開催されて施設が賑わうが、月～金曜日は多くの利用者を見込む事ができない。

地域経済波及効果向上のみを花巻市の目的とするのであれば、受け入れ態勢の更なる整備が必要である。しかし、花巻市所有のスポーツ施設程度を有する地方中心都市は他にも存在している。今後、他地方都市と競合する場合、花巻でなければならない理由が必須となる。勿論、花巻市の存在価値は北上・花巻都市圏としてだけでなく、岩手県内有数の地方都市としての役目・役割も大きく、それは花巻でなければならない理由の1つにもなりうるであろう。

〈3・2〉 宗像市の取り組み及びその課題

宗像市は福岡県北部に位置し、北九州・福岡の両政令指定都市の中間にある学術・文化都市として成長している。総人口は96,579人と県内では10番目であるが、宗像市隣接・周辺自治体に地方中心都市は存在しておらず、

正に地方中心都市と言える(2015年度現在)^{*7)}。

近年、文化庁による世界遺産候補に「宗像・沖ノ島と関連遺産群」が推薦された事で、「古来より交通の要所として栄えた町、宗像」とメディアでも取り上げられるようになった。この農業・漁業が盛んであった宗像の都市化は、1964年の鹿児島本線の電化からである。この電化に伴って市内には大学、団地の誘致・建設が始まった。1975年の人口は現在の約半分と報告されている。

宗像市のスポーツ施設は、3つの市営体育館、有料スポーツ公園施設等(宗像ユリックス)を含む公共施設とスタジアム、陸上競技場、体育館等を運営している民間施設(グローバルアリーナ^{*8)})に分けられる。宗像市スポーツ推進計画によると¹²⁾、市営の3体育館の稼働率は非常に高く年間約18万人が利用しており、利用者の施設確保が困難な状況と報告されている。また、グローバルアリーナでは年間を通して様々な大会がほぼ毎週末開催されている。平成23年度の宗像市宿泊施設利用実績によると、日帰り実績は35万人を超え、宿泊実績では約10万人と報告されている。

市によるスポーツ観光へのアプローチは、産業振興部商工観光課と市民協働環境部文化スポーツ課といった別々の部署からである。文化スポーツ課は、宗像市スポーツ推進計画にてスポーツ観光による地域経済活性化を1つの施策としている。その施策詳細は下記の通りである。

- ・全国・九州レベルのスポーツ大会の誘致
- ・スポーツ合宿の誘致
- ・宿泊を伴うスポーツ大会の開催
- ・スポーツ観戦機会の提供
- ・むなかたスポーツコミッション(仮称)の設立

宗像市の課題は、『施設(スポーツ施設・宿泊施設)』とスポーツツーリズムを推進していく『組織』である。宗像市内の公共スポーツ施設は、利用者が多く稼働率こそは高いが、大規模な大会を開催する基準を満たしていない。また、1番新しい市民体育館の築年数が30年を越えている。市内には、約1000室の宿泊施設が点在しているが、ホテル・旅館と宿泊形態(値段・立地等)が異なっており、大会誘致を伴った大多数の宿泊客は取り組み難い。宗像市は高速道インターチェンジまでも比較的近い。また、JR鹿児島本線で博多まで約30分、小倉まで約40分と電車での移動も容易であり、九州一円、或いは西日本までは移動圏内とも言える。つまり、宗像市内に宿泊しなければならない理由が無い限り、宗像市内に宿泊する必要が無い。逆に、民間スポーツ施設はスポーツ施設と宿泊施設が同じ敷地内にあり、独自の国際大会等を企画運営開催し、日帰り客を含む多くの訪問者を集客している。

次の課題は、スポーツツーリズム推進組織についてである。宗像市スポーツ推進計画にて「むなかたスポーツコミッション（仮称）の設立」が掲げられているが、未だに準備委員会ですら開かれていない。各部署或いは民間施設との連携協力は図られてはいるが、依然、宗像市として大会・合宿誘致などを一手に取りまとめる組織は存在していない。

〈3・3〉 事例から明らかになった地方中心都市におけるスポーツツーリズムの課題

地方中心都市におけるスポーツツーリズムの現状事例として取り上げた両市は、スポーツによる観光を市の施策の1つとしている。しかし、高速交通網が備わった地方中心都市としての花巻市と、九州の中心である福岡市（地方中枢都市）の圏内とも言える宗像市とでは、スポーツツーリズムの取り組み方、及びその課題其の物が根本的に異なっている。花巻市は、地方中心都市の位置付けではあるが、地方中核都市の存在価値・意義があり、地域での中心的役割を担う必要がある。逆に宗像市は、福岡市・北九州市と言った地方中核都市圏内である事を強みにして、福岡市・北九州市との連携が必須である。

上記したように、各地方中心都市（各自治体）が置かれている状況は決して一元化できるものではない。スポーツツーリズムへの取り組みと併せて、スポーツ施設、交通網、宿泊施設、住民意識、周辺自治体、更には気候・天候などを含む自然環境に至るまでを含めての幅広い検討・対策が求められる。

4. 考察

地方中心都市のスポーツツーリズムの現状として、花巻市と宗像市のスポーツツーリズム取り組み及びその課題について抽出した。前述した通り、日本全国の地方中心都市全てが同じ環境にある訳でなく、自治体それぞれ特有の問題が存在している。下記では、他地方中心都市（地方中小都市）の様々な取り組みを参考に、地方中心都市におけるスポーツツーリズムの可能性について考察する。

〈4・1〉 地方中心都市が持つスポーツディスティネーション

日本スポーツツーリズム推進機構は¹³⁾、スポーツツーリズムの資源として活用可能な自然環境、スポーツ空間、スポーツ施設、スポーツサービスの存在、またスポーツツーリストを魅了できる場所をスポーツディスティネーションと定義している。このスポーツディスティネーションに基づくのが、ディスティネーション・イメージである。つまり、訪問者が抱く訪問先のイメージ、或いはメディア・他者からの口コミによる情報によってディスティネーション・イメージを形成し、訪問先を選択しているのである。スポーツイベントの参加者は、通常の旅行者よりも肯定的なイメージを持つ事が報告されている¹⁴⁾。また、朴らの研究によっても¹⁵⁾、スポーツツーリズ

ムによって社会的・経済的効果を地域住民が得られるとの事、そしてスポーツイベントの満足度が高いと地域のイメージが向上し、再訪したいという気持ちに影響があるとの見解が示されている。つまり、スポーツイベントだけでなく、付随する魅力的で満足度を高めリピートしたくなる何かがある事によって更に、ディスティネーション・イメージが向上するのである。その何かとは、文化・歴史遺産や建造物、祭り、商業施設、宿泊施設、更には美しい景観や拘りの食材を使用したレストラン、各種限定品など、幅広く多種多様な事柄が考えられる。下記には、ディスティネーション・イメージによって、国内外にて人気の高いスポーツディスティネーションを紹介する。

外国人観光客から絶大な人気を誇り、国際リゾートとして名高いのが北海道のニセコである。総人口 4,914 人（2015 年 3 月現在）といった小さな町が、スポーツツーリズム産業の最先端である。ニセコ町商工観光課の調査によると¹⁶⁾、2002 年の 5,962 人を皮切りに、2007 年には 39,786 人、そして 2010 年には 61,689 人へ達したと報告されている。2014 年度の外国人宿泊客数は 148,335 人であり、全体の宿泊観光客数（343,196 人）の約 4 割を占めている事がわかる。その外国人観光客の多くは、アジア・オセアニアであり、特に香港（29,753 人）、オーストラリア（22,129 人）からの訪日である。この外国人観光客の急激な増加は単なる偶然では無く、ニセコが持つ自然資源とスポーツの融合に着目した先駆者の存在と、それに纏わる幾つかの要因に基づいている。杉谷らは¹⁷⁾、ニセコ地域に外国人観光客が急増した理由を以下の 5 つにまとめている、1) 自然資源の優良さ、2) 移住者による「口コミ」による評判、3) オーストラリア人のライフスタイルに合致、4) スキー・ディスティネーションとしての代替地、5) オーストラリア国内の好景気・レート高騰である。

ニセコ同様、地域外から多くの訪問客を集めているのが、「石垣島トライアスロン大会¹⁸⁾」である。トライアスロン大会出場もその人気の1つであるが、何よりも温暖な南の島「石垣島」と言ったディスティネーション・イメージも大きな要因であろう。人口約 45,000 人の石垣市にとって、この大会による経済波及効果は非常に大きい。2015 年募集内容によると、部門：エイジー一般 450 名、リレー（3 名 1 組）150 名と最低限の参加者だけで 600 名が島を訪れる計算である。だが実際には、平成 21 年度大会には 7,400 人の参加者（選手と家族 5,090 人、マスコミ関係者 280 人、ボランティアスタッフ 2,050 人）であった。その直接的な経済効果は 3 億 6 千万円、総経済効果は約 6 億 2 千万円と試算されている。

夏季冷涼・晴天率の高さと言った快適な気候を魅力の 1 つとしているのは、夏ラグビーの聖地とも呼ばれる長野県の菅平高原である。菅平（高原）は、約 15 万 6 千人の人口を抱える上田市の一部であり、100 面を超えるグ

ラウンドが整備され、全国各地から多数のチームが訪れる。練習だけが目的ではなく、練習試合相手が多数いる事も合宿地を選択する1つの要因である。従って、良き練習試合相手が合宿をしている場所であればあるほど、魅力ある合宿地としての地位を築き、他との差別化が可能となる。また、天然芝のグラウンドはサッカー等多種目の合宿にも好都合である。この魅力はスポーツだけに留まらず、シーズン前とは言えレベルの高い練習や練習試合を観戦しに来る第二次的な客（スポーツ愛好者）の誘致も見込む事ができる。

〈4.2〉 スポーツコミッションの設立

大会・イベント誘致から宿泊予約、交通機関の手配、弁当予約からお土産紹介に至るまでをスムーズかつ、一括して扱う組織がスポーツコミッションである。多岐に渡る訪問客の要望をたらい回しにせず、受け入れ窓口1箇所ですべてに対して対応可能なのがスポーツコミッション最大の強みである。従って、スポーツコミッションは、スポーツ関係各部署の担当者のみでは無く、幅広い見地を持った人々で構成すべきである。

石坂は¹⁹⁾、スポーツ・ツーリズムの取り組み及びその活性化には、総合的な環境作りが必要であると述べている。この総合的な環境とは、スポーツコミッションの事と考えても良いであろう。つまり、各種業界が横断的に連携可能な組織が立ち上がる事によりスポーツツーリズムの取り組みが活性化すると考えられる。新潟県の離島、佐渡島全域を市域としている佐渡市（人口約6万人）の佐渡版スポーツ・ツーリズム推進会議では²⁰⁾、総合政策監・社会教育課・観光商工課・農林水産課・島づくり推進課・交通政策課・総務課・総合政策課と幅広い部署から構成されている。また、オブザーバーとしてトリアスロン事務局、佐渡観光協会が加わっている。本組織は、今後のスポーツツーリズム事業推進の為に、関係機関の継続的な連携の為の会合、各事業の進捗状況の把握を上げ、今後のスケジュール及び主管課を明確にしている。佐渡の事例のように、共通性を持った他の運営団体、コミッションやコンベンションビューロー等の類似組織との連携協力及び支援もコミッション設立時に検討すべきである。

スポーツツーリズムの推進を主とする経済的効果重視のスポーツコミッションの設立に対して本郷は²¹⁾、下記のような苦言を呈している。スポーツツーリズムによる経済成長だけではなく、社会的効果の高い地域活性をも視野に入れたコミッション作りが必要であると述べている。

〈4.3〉 広域連携コミッションの設立

広域連携コミッションは、国土面積が狭いにも関わらず、高速交通網が発達している日本だからこそ有効な考え方である。スポーツツーリズムの基点となる場所に対して、周辺地域が集客推進の連携を取るのである。飛行機であれば成田・羽田・関西の空港、国港湾へのクルー

ズ船の寄港は横浜・神戸・長崎・博多などが主な入国地である。地方中心都市が訪日観光客を「我が町」に引き込む最も容易な方法は、入国地からの誘致である。各地方中心都市が国外PRに力を入れるのではなく、入国地との広域連携を取る事によってお互いの価値を見出す事も可能である。

例えば、アジアの国々（特に中国・韓国）からの訪問客であれば、日本のアジアへの玄関口とも呼ばれる福岡（福岡空港・博多港）から移動が始まる。現在、アジア人観光客の多くは太宰府天満宮（福岡）や宇佐神宮（大分）、或いは阿蘇で観光をし、長崎の雲仙、或いは大分の別府で温泉を堪能して、福岡市内の商業施設での買い物が必要なコースとなっている。博多駅から約30分の位置にある宗像市に期待する何かがあれば、訪問先の選択肢として上がってくるのではないだろうか。その為には、訪問客の目的を明確にし、その目的に合致・享受可能な地域特有の魅力・特色を準備しておく必要がある。特に、訪日旅行中の外国人に対しては、如何に魅力的で満足度を高め、リピートしたくなるポイントを持った企画を作り上げていくかが重要であると言えるだろう。その達成には、地域行政間の協力、スポーツと地域の魅力との連携、そしてプロモーション戦略などが欠かせない²²⁾。

広域連携コミッションの例は、しまなみ海道で繋がっている広島県と愛媛県から見る事ができる。広島県には年間80万人を超える外国人観光客が訪れているが、愛媛県の外国人の宿泊者数は思いのほか低く、2014年度の外国人延べ宿泊数は6万5千人（前年比▲2.5%）と全国38位である。その愛媛県が着目したのが“しまなみ海道”を軸に広域連携を進める方法である。愛媛県はしまなみ海道を利用した広島県からの観光客増員を見込み、広島県は愛媛県にも容易に足を運べる事をセールスポイントに観光客を見込むと言ったウィンウィンの関係を築いている²³⁾。しまなみ海道を利用したスポーツツーリズムとは、自転車（サイクリング）である。年間を通じて温暖な気候と豊かな自然を満喫しつつ、海風に吹かれながら渡るしまなみ海道がその特徴である。観光協会によるレンタサイクル、荷物の配送など市・県を跨いでの広域連携が取られている。

観光施策の一環として、積極的にMICEを推進している地方中核都市圏と地方中心都市による広域連携コミッションは効果的な手段として提案できる。各自治体による、「俺が俺が」の地域自己アピールによる観光客誘致や観光客の囲い止め（集約）ではなく、交通・宿泊などに対しての機能が備わっている三大都市・都市圏・地方都市・中核都市（圏）を広域連携コミッションの中心（ハブ）として位置付けられないだろうか。地方中心・中小都市は、広域連携コミッションの中心であるハブ都市から「もう一泊」、或いは「また来たい」を引き出せないだろうか。つまり、各都市の観光客誘致競争を激化させる

よりも、ハブ都市を訪れた観光客に対して、エクスカーションによる地方中心都市の訪問を推進すべきである。

佐藤らは²⁴⁾、目的地の継続発展には、スポーツエクスカーション（日帰り客）、とスポーツツーリスト（宿泊客）を分け隔てるのではなく集客する必要があると述べている。日帰り客であるスポーツエクスカーションは、高いクオリティを求めての訪問であるが、宿泊を伴うスポーツツーリストは、多角的価値を求めている事を報告している。つまり、大都市は周囲の中心・中小都市と広域連携を進め、ハブ機能を向上させることにより、観光客が望む様々な要望を包括的にまとめる事が可能となる。その結果、多角的な価値を求める多くの訪問客を継続的に獲得できる。

広域連携コミッションとしての可能性は、地域だけに留まる必要は無く、幅広い形態での連携も視野に入れる事ができる。具体的な例としては、古来より行われている「お遍路」が挙げられる。ある目的達成の為に関係各地・各所が広域にて連携を進める方法である。スポーツツーリズムの広域連携事例として、下記に「オルレ^{*9)}」と「森林セラピー基地・ロード²⁵⁾」を取り上げる。

隣国韓国の影響を受けて、九州では「オルレ」が整備され、人気を集めている。2015年現在、自然豊かで文化遺産がある地域を中心に九州圏内で15コースが整備されている。先述した地方中心都市の宗像市には「宗像・大島コース^{*10) 26)}」が整備されている。オルレ同様に人気を集めているのが、森林セラピー基地・ロードである。2015年現在、全国に60の森（基地・ロード）が点在している。土井は²⁷⁾、森林セラピー基地の難易度は低く、気楽に歩ける入門向けコースが約9割であると報告している。2時間程度の歩行、標高差が100メートル程度といったコース設定が中高年・女性に人気が高く、現在の様々な社会事情を踏まると、今後通常の登山からセラピー型への移行が更に増えるであろうと示唆している。

5. まとめ

スポーツとツーリズムの概念を融合させたのがスポーツツーリズムである。そのスポーツの領域は、前節のスポーツコミッションで述べたように、身体的活動のみに留まらずレジャー・レクリエーションの領域にまで広がっている。趣味・生きがいとしての「する・観る・支える」スポーツが確立されていく事で、更にスポーツツーリズムの可能性は広がっていくと考えられる。すなわち、趣味・生きがいを通じたツーリズムの拡大・拡充である。

本稿では、地方中心都市におけるスポーツツーリズムの取り組みとその可能性について考察してきた。日本の地方中心都市においてスポーツツーリズムを推進して行くには、各自治体に見合った形式によるスポーツコミッションの設立や広域連携コミッションの推進が急務である。

三大都市、都市圏、地方都市・中核都市（圏）の多く

では、既にコミッション（別名称の場合もある）が設立され、訪日観光客、或いは観光客の誘致・招致活動が積極的に行われている。これらの都市をスポーツツーリズムの中心点（ハブ）として位置付け、その周辺地方中心都市は広域で連携を強めていく事が重要、またそれが地方中心都市の役割である事も明確になった。陸海空が地区ごとに区分けされているのではなく、海は浜で山は尾根でと繋がっている事を踏まえれば、広域で連携した対応が求められているのは当然の事である。

スポーツの可能性は無限、またツーリズムの可能性も無限である。この大きな可能性を秘め、形式を持たないスポーツとツーリズムの融合だからこそ、観光客に対して多角的な「目的」を示すことが必要である。その街々（地域）が備え持つ、自己の魅力・特産を含む「目的」を明確にした上で、広域連携を組む必要がある。地方中小都市におけるスポーツツーリズムの取り組みは、一元化できるものではない。また、その地域毎の事情も多く勘案すべきであろう。ラグビーワールドカップ2019、そして2020年東京オリンピック・パラリンピックの準備が進む中、今後の地方中心都市におけるスポーツツーリズムの取り組み、その可能性に注目していきたい。

引用・参考文献

- 1) 工藤 康宏, 野川 春夫: スポーツ・ツーリズムにおける研究枠組みに関する研究, 順天堂大学スポーツ健康科学研究, 第6号 pp.183-192 (2002)
- 2) 秋吉 遼子, 山口 泰雄, 朴 永昊, 稲葉 慎太郎: スポーツツーリズムを通じたまちづくりに関する研究, SSFスポーツ政策研究, 第2巻1号 pp.144-151
- 3) スポーツツーリズム推進基本方針 ～スポーツで旅を楽しく国・ニッポン～: スポーツ・ツーリズム推進連絡会議 平成23年6月14日 <http://www.mlit.go.jp/common/000160526.pdf> (2015.9.8 閲覧確認)
- 4) 山下 真輝: スポーツツーリズムによる地域活性化を目指して, <https://www.f-ric.co.jp/fs/201104/08-09.pdf> (2015.9.8 閲覧確認)
- 5) 一般社団法人 スポーツツーリズム推進機構 (JSTA)
- 6) 独立行政法人 国際観光振興機構 (通称: 日本政府観光局 JNTO)
- 7) 株式会社いよぎん地域経済研究センター: インパウンドの視点から見た、スポーツツーリズムの可能性, IRC Monthly, 2015年6月号 <http://irc.iyobank.co.jp/topics/press/270528.pdf> (2015.7.9 閲覧確認)
- 8) スポーツツーリズムの展開 ～地域資源を活用した観光地域づくりの一例～: 日本政策投資銀行 2015年2月 http://www.dbj.jp/pdf/investigate/etc/pdf/book1502_01.pdf (2015.9.8 閲覧確認)
- 9) 傍士 鏡太: “街なかスタジアム”は地域の交流拠点, <https://www.f-ric.co.jp/fs/201104/08-09.pdf> (2015.9.8 閲覧確認)
- 10) 第四次全国総合開発計画: 国土庁 昭和62年6月 p.60
- 11) はなまきスポーツコンベンションビューロー <http://hanamaki-scb.jp/> (2015.9.11 閲覧確認)
- 12) 宗像市スポーツ推進計画: 宗像市 (平成27年4月)
- 13) 一般社団法人日本スポーツツーリズム推進機構編: 「スポーツツーリズム・ハンドブック」, 学芸出版社 (2015)
- 14) 柳 久恒, 柴田 恵里香: オーストラリア・ニュージーランド・スポーツマネジメント学会第15回大会, スポーツマネジメント研究, vol.2, No.1 pp.75-78 (2010)
- 15) 朴 永昊, 秋吉 遼子, 稲葉 慎太郎, 山口 志郎, 山口 泰雄: スポーツツーリズムによる地域活性化のアクションリサーチ,

- SSF スポーツ政策研究, 第1巻1号 pp.150-159
- 16) 数字で見るニセコ ニセコ町統計資料 2015年5月末版
<http://www.town.niseko.lg.jp/machitsukuri/files/suujide-miru-niseko.pdf>
 - 17) 杉谷 正次, 青木 葵, 石川 幸生, 御園 慎一郎, 杉浦 利成:
 スポーツ・ツーリズムの可能性を探る ―国際リゾートをめざす
 北海道ニセコ地域の事例から―, 東邦学誌, 第40巻第2号 pp.1-15
 (2011)
 - 18) ISHIGAKI TRIATHLON 2015 <http://ishigaki-triathlon.com/>
 (2015.9.8 閲覧確認)
 - 19) コラム: スポーツ・ツーリズムの魅力 石坂信也
http://www.jacd.jp/news/column-manager/130515_post-119.html
 (2015.9.11 閲覧確認)
 - 20) 佐渡市 佐渡版スポーツ・ツーリズム推進会議 報告書「平成22
 年度佐渡版スポーツ・ツーリズムのあり方について」
 - 21) 本郷 満: スポーツによる地域活性化, 中国電力(株) エネルギー
 総合研究所 エネルギア地域経済レポート, No.472 pp.1-8
 (2013)
<http://www.energia.co.jp/eneso/keizai/research/pdf/MR1311-1.pdf>
 (2015.7.9 閲覧確認)
 - 22) 国土交通省観光庁 第3回スポーツ・ツーリズム推進連絡会議
 【資料7】スポーツツーリズムの推進について 中間報告
<http://www.mlit.go.jp/common/000121402.pdf> (2015.7.9 閲覧確認)
 - 23) インバウンドの視点から見た, スポーツツーリズムの可能性
 ～アクティブツーリストを惹き付ける“スポーツ×観光”のすすめ
 ～: 株式会社いよぎん地域経済研究センター 平成27年5月
<http://www.iyobank.co.jp/library/new/press/15-105.pdf> (2015.9.8 閲覧
 確認)
 - 24) 佐藤 晋太郎, 原田 宗彦, 大西 孝之: スポーツツーリストと
 スポーツエクスカーションの再訪意図, スポーツマネジメン
 ト研究, vol.1, No.1 pp.19-31 (2009)
 - 25) 特定非営利活動法人 森林セラピーソサエティ
<http://www.fo-society.jp/index.html> (2015.9.11 閲覧確認)
 - 26) 九州観光情報サイト 九州旅ネット>九州オルレ>宗像・大島コ
 ース <http://www.welcomekyushu.jp/kyushuolle/?mode=detail&id=15>
 (2015.9.8 閲覧確認)
 - 27) 土井 明: アウトドア・ツーリズム都市構築の可能性, 創造都市
 研究 e, 9巻1号 pp.67-85 (2014)

島内巡りのコースである事, 天然の自然環境と深い歴史(宗像・
 沖ノ島と関連遺産群として世界遺産候補に推薦された一部)を
 感じる事

注

- * 1 国土交通省は2003年に外国人旅行者の訪日促進活動として「ビジ
 ット・ジャパン・キャンペーン」を開始し, 2010年までに年間1000
 万人の外国人旅行者が訪日することを目標とした。その後, 訪日
 外国人旅行者数は, 2013年に1000万人を超え, 2014年に1341
 万人に達した。観光庁の発表によれば, 2015年(9月16日現在)
 で1342万人と過去最高が確実となり, 年間で1900万人に到達す
 るとの見込みである。(参考: NHK NEWSweb www3.nhk.or.jp)
- * 2 岩手県市町村数: 14市・11郡・15町・4村
- * 3 花巻市総合体育館: 1階; アリーナ 60m×45m (バレーボールコ
 ート3面, バスケットボールコート3面, ハンドボールコート2
 面) サブアリーナ 34m×21m (バレーボールコート1面, バス
 ケットボールコート1面) 2階; 観客席 2,068名
- * 4 花巻市総合体育館アネックス: アリーナ 49m×34.2m (フットサ
 ル1面, ハンドボールコート1面, バスケットボールコート2面,
 バレーボール2面, テニス2面, バドミントン10面, 卓球12面),
 観客席 1,982名
- * 5 花巻球場: 両翼92m・センター120m, 夜間照明完備, 屋内練習場
 2ヶ所, 観客席12,000人(内野席5,700人, 外野席・芝生6,300
 人)
- * 6 日居城野陸上競技場: トラック1周400m 6レーン(第4種公
 認) 全天候型舗装, フィールド内 天然芝舗
- * 7 福岡県市町村数: 28市・12郡・30町・2村
- * 8 グローバルアリーナ: <http://g-arena.com/>
- * 9 オルレ: トレッキングコースの総称。その魅力は海岸や山などを
 五感で感じ, 自分のペースでゆっくりとコースを楽しむ事。(参考
<http://www.welcomekyushu.jp/kyushuolle/?mode=about> 2015.9.8 閲覧
 確認)
- * 10 宗像・大島コース: 本コースの特徴は, 移動手段が船と言った